



みどりの風

平成29年6月号 在籍児童数470名

学校教育目標

- 自ら考えのびる子
- 思いやりのある子
- 進んで体をきたえる子

褒められて育つ子ども

校長 吉野 高男

雲り空が続く中、時折、顔を出す太陽が真夏のような日差しを注ぎます。6月になり、早いもので1学期も折り返し点を過ぎました。連休が明けて、すぐにPTA定期総会、家庭訪問、遠足、田植え体験、引渡し訓練、プール清掃、陸上練習、新体力テスト……等々、実に多くの行事がありました。とりわけ家庭訪問や引渡し訓練では保護者の皆様に多大なご協力を頂き、誠にありがとうございました。子ども達は、これらの行事に元気よく取り組み、新しい学級の仲間との絆を深めています。

さて、5月4日付の読売新聞に「褒められた子へこたれない大人に」という記事がありました。「国立青少年教育振興機構」の調査で、子どもの頃に周囲に褒められた経験が多い人ほど、大人になってから困難な状況に直面しても、「へこたれない傾向にあることがわかったということです。調査は、昨年10月に20～60歳代の5000人を対象に行われました。「失敗してもあきらめずにもう一度挑戦する?」「厳しく叱られてもくじけない?」などの質問を通して、「褒められた」経験が多い人ほど、「へこたれない力」が強く、同時に「厳しく叱られた」経験が多ければ、より「へこたれない」傾向がみられた、とありました。

古い教育観にあっては、厳しさこそ子どもを伸ばす大切な要素と信じられてきましたが、現代においては、厳しさだけではなく、それよりもいかに褒めるかが、子どもを伸ばす大切な要素であるということが、多くの人に理解されてきています。上述の新聞記事は、そのことを明らかに物語っています。

私は中学校勤務の頃、女子テニス部の顧問を長く務めました。今振り返ると部員を叱ってばかりの指導だったと反省するばかりです。数年前、ある教え子と約20年ぶりに再会したときに、彼女の言葉をありがたく感じました。「先生は覚えてないかもしれないけれど、先生は私のバックハンドをすごく褒めてくれたのですよ。それがとても嬉しくて、先生の一言で私は厳しい練習に耐えられました。中学校の部活を頑張れたことが自信になって、大人になってからも仕事を頑張っているのだと思います」と話す彼女は、もう30代なかばの小学生の子の立派な母親でした。そう言われた当の私は、彼女をどんな言葉で褒めたのか全く覚えてなくて、赤面の思いでした。必死に頑張っていた当時の彼女の姿ははっきりと思い出されるのですが、試合に負けたことなどを叱ったことばかり思い出されました。再会した教え子との会話から、子どもは褒められた言葉そのものはもちろん、それで意欲が増したりしたことも言葉かけした教師や親以上によく覚えているものだと思えました。そして、そういう経験をした子どもは、精神的なたくましさを身に付けた大人になれるのでしょうか。

褒めるべきところは大いに褒め、悪いことはきちんと叱るという大原則が大切なのはもちろんですが、何よりも日常的に子どもとしっかりと向かい合っていることが重要かと考えられます。また、子どもは教師や親など大人からの言葉かけをいつも待っています。「篠っこ」に私たち大人が皆一緒になって、溢れる褒め言葉と、時に愛情深く叱ることのでたくましく育んでいきたいと思えました。